宇部高専市民文化サロン活動報告

石川源一*

Report on Activities for the Civic Culture Salon in National Institute of Technology, Ube College

Gen'ichi Ishikawa

Abstract: This activity report describes what is required and what is expected of lectures for the public, mainly English literature reading, based on the responses and questionnaires obtained from participants in NIT, Ube college Civic Culture Salon lectures held in 2022 and 2024.

Keywords: Civic culture salon, English literature, Frankenstein, The Daydreamer

1. はじめに

宇部高専市民文化サロンとは、宇部工業高等専門学校一般科教員が、人文科学や社会科学、自然科学にわたる幅広い学術分野について一般市民の方々に分かりやすく紹介し、自由な意見交換等を通じて受講者の教養を高めることを目的に実施している地域貢献事業である。本事業は平成 21 年より開始され、宇部高専内外の教室を活用しながら現在も毎年多種多様な講座を開講している。開講時期は担当教員によるが、概ね 10 月と 11 月にそれぞれ 1 回の計 2 回、1 回の講座は 90 分である。

筆者は令和 4 年度から現在まで毎年本サロンを担当し、今年度で 3 年目である。各年度の担当サロンでは英文学の名著とされる作品を取り上げ、物語の内容、読者を引き込む人物や場面設定に用いられる単語の選択などを分かりやすく解説している。これによって参加者に作品の世界観や雰囲気を感じ取ってもらい 、原文で読むことの醍醐味を味わってもらうことを目指している。

各年度に取り上げた作品は、令和 4 年度が Mary Shelley の *Frankenstein*、令和 5 年度が Jane Austen の *Pride and Prejudice*、令和 6 年度が Ian McEwan の *The Daydreamer* である。

George Levine[1*]は「*Frankenstein* は架空の”行き過ぎた挑戦者”たちの長い伝統のなかで最初期の作品であり、様々な形でファウストの神話を体現する登場人物たちを書いたものである。そして、その神話を神秘や奇跡の世界から日常の世界へと移し替えている。」と述べており、現在に至るまで Marilyn Butler[2*]など多くの研究者たちが「創造主と被造物のそれぞれが野心に翻弄され悲しい結末を迎える壮大な物語」と提示してきた。

Pride and Prejudice においては Mary Lascelles[3*]が「これは歴史的な距離ではなく、むしろ感情の阻害である。高尚な喜劇の世界は田園詩の世界と同様に再び入り込むのが難しく *Pride and Prejudice* はオースティン的喜劇の純粋な本質を体現している。」と示し、その後も Oliveira[4*]が「これは恐らく最も読まれ、研究され、翻訳された小説である。」と述べたように、現在でも高い人気を誇っている。

Chalupsky[5*]は「*The Daydreamer* は遊び心がありながらも素直に読める文章だ。」や「*The Daydreamer* は、子供の想像力の重要な役割と、それがしばしば大人に誤解されることを強調し、称賛する。」と述べている。その他にも Martina[6*]は当作品を「各物語は、子どもならだれでも経験するような日常生活の場面に設定された道徳的メッセージが含まれている」と言っている。いずれの作品も個人的な感情や経験を共有し合うことができ、講読に適していると判断した。

本稿では、令和 4 年 10 月 22 日及び 11 月 26 日に実施した宇部高専市民文化サロン「原作から読み解くフランケンシュタインの正体」[7*]についての活動と共に、令和 6 年 10 月 26 日及び 11 月 30 日に実施した同サロン「*The Daydreamer* を読む」[8*]について報告する。前者は、原文の講読と共に作者や作品制作の経緯紹介など作品の周辺情報にも目を向けた。後者は、原文を講読することのみに焦点を当て作品の内容理解を重要視した。これらの講座から得られた受講者の反応やアンケートをふまえて、英文学講読を主体とした市民向け講座においてどのようなことが求められているのか、どのようなことが期待されているのかを述べたい。

(2025 年 2 月 7 日受理)

*宇部工業高等専門学校

2.　令和 4 年度講座内容実施報告

2.1.　*Frankenstein* を題材とした目的

日本人がフランケンシュタイン、フランケンシュタインに登場する怪物などの名称を見聞きした場合に思い描くイメージ像は、原作を読んだことがない層においては頭部にボルトが刺さった容姿で鈍重な動きをするものではないだろうか。更に明瞭な言葉という伝達手段を持たず、呻き声を発しながら不可解な行動をとるが決して利己的なものではないというイメージが、20 世紀以降に製作された派生作品では散見される。しかしながら原作にはそういった表現がないため、上記のようなイメージは何らかに因って定着したことが分かる。更に当該作品はそのストーリーの重厚さや登場人物たちの生々しい心理描写があまり紹介されておらず、キャラクターとしてのフランケンシュタインの怪物に焦点が当てられる。更にキャラクターとしてのフランケンシュタインの怪物のイメージが先行することにより、原作が単純なホラー小説として捉えられることも少なくない。よって本サロンでは *Frankenstein* の被造物に関する誤ったプロトタイプ的イメージについて解説し、本来の被造物の特徴や物語全体の紹介を目的とした。

2.2.　作品の周辺知識や作品構造の紹介

本サロンでは作者や作品が生まれた経緯、作品の構造に至る部分まで 1818 年版の本文テキスト[9*]を引用しながら細やかに紹介し、原作に広がる重々しく悲しい世界、生き生きとした登場人物たちの描写、作者が読者に投げかけるメッセージについても丁寧に解説した。併せて当サロンに参加される受講者が英語にあまり慣れ親しんだ方ではないことを前提として、難解な紹介にならないよう当サロンの第 1 回目は作品に関するクイズから始まる作品鑑賞を主体としたハンドアウトを作成し、第 2 回目は第 1 回内容をおさらいした上で「人間を創り出すことについて賛成か反対か」を問う自由な意見交換会を行った。当サロンにおける自作の配布用ハンドアウトには 1818 年版の英文と筆者による試訳を併記している。

作品を読む際、著者の生い立ちと当時の社会背景を事前に導入することは作品への理解がより深まると考え、著者メアリー・シェリーの紹介から始めた。本作品は女性であるメアリー・シェリーによって 19 歳の頃に書かれたこと、当時バイロン卿の別荘にて *Frankenstein* の物語の着想を得た経緯、女性が男性への隷属を強制されていた社会について、メアリー・シェリーの両親が無政府主義者のウィリアム・ゴドウィンとフェミニズムの先駆者として知られていたメアリー・ウルストンクラフトであることなど、作品を深く鑑賞するための作者とその周辺知識の紹介を行った。

Frankenstein はチャプターが進むにつれ語り手が入れ替わり、作品全体を俯瞰すると大きな入れ子構造になっていることに気づく。物語は野心に燃える船長ウォルトンが姉に宛てた手紙から始まり、その後北極で救助したヴィクター・フランケンシュタインへと視点が変わる。更にヴィクターが語り部として彼のこれまでの記憶の話をしている中で、彼の創り出した被造物（怪物という呼称は無い）の視点へと変化していく。この入れ子構造は同じ出来事を 3 人の語り手がそれぞれの視点で語る。視点が変わる事により物語内で起きる出来事は読者の客観性を失わせ、その結果、読者はそれぞれの語り部に感情移入を繰り返しながら結末まで見届けることとなる。受講者の多くが小説やドラマを鑑賞する際、ストーリーの展開や人物の心理描写を重要視しているとのことだったため、作品の中に入る視点に加え作品の外から俯瞰する視点の解説を加えた。

2.3.　被造物の紹介及び解説

本作品で第 3 の主人公として象徴的に描かれる被造物は死体を繋ぎ合わせられた醜い外見をしているが、頭部のボルトが無い点など原作の外見上の特徴を表している箇所と言語を習得していく箇所を引用し紹介した。以下引用部分である。

How can I describe my emotions at this catastrophe, or how delineate the wretch whom with such infinite pains and care I had endeavoured to form? His limbs were in proportion, and I selected his features as beautiful. Beautiful! — Great God! His yellow skin scarcely covered the work muscles and arteries beneath; his hair was a lustrous black, and flowing; his teeth of a pearly whiteness; but these luxuriances only formed a more horrid contrast with his watery eyes, that seemed almost of the same colour as the dun white sockets in which they were set, this shriveled complexion, and straight black lips.

Volume I, Chapter IV

「この大惨事に直面した私の感動をどうして書き記すことができよう。あれほど心血を注ぐ努力をして造ったもののことを、どうして詳しく書けるだろう。手足はつり合いが取れ、顔つきは美しいものを選んでおいたのだ。美しいだと！なんということだ！黄色い皮膚は、下の筋肉や動脈の働きを紙一重で蔽っていたし、髪の毛は艶やかに黒くふさふさしており、歯は真珠色がかった白であったが、こういうものが立派に見えるだけに、暗褐色を帯びた白の眼窩とほとんど同じように見えるどんよりした眼や、しなびた肌や、一文字に結んだどす黒い唇と、恐ろしい対照をなしていた。」

Volume I, Chapter IV　試訳は筆者

“By degrees I made a discovery of still great moment. I found that these people possessed a method of communicating their experience and feelings to one another by articulate sounds. I perceived that the words they spoke sometimes produced pleasure or pain, smiles or sadness, in the minds and countenances of the hearers. This was indeed a godlike science, and I ardently desired to become acquainted with it. But I was baffled in every attempt I made for this purpose. Their pronunciation was quick; and the words they uttered, not having any apparent connexion with visible objects, I was unable to discover any clue by which I could unravel the mystery of their reference. By great application, however, and after having remained during the space of several revolutions of the moon in my hovel, I discovered the names that were given to some of the most familiar objects of discourse: I learned and applied the words fire, milk, bread, and wood. I learned also the names of the cottagers themselves. The youth and his companion had each of them several names, but the old man had only one, which was father. The girl was

called sister, or Agatha; and the youth Felix, brother, or son. I cannot describe the delight I felt when I learned the ideas appropriated to each of these sounds, and was able to pronounce them. I distinguished several other words, without being able as yet to understand or apply them; such as good, dearest, unhappy."

Volume II, Chapter IV

「わたしは、そのうちに、もっと重要な発見をした。この人たちが、自分の経験や感情をそれぞれ区別のある声音で、お互いに伝え合う方法を持っていることが分かったのだ。この人たちの話す言葉が、時には聞く者の心や顔色に歓びや苦しみ、笑顔や愁いを起させるのに、私は気づいた。これは神のような術で、私は熱烈にそれを覚えたいと思った。しかし、そのためにいろいろとやってみたが失敗してしまった。この人たちの発音が速くて、話される言葉が眼に見える対象と明白な結びつきもないので、何のことを言っているのか、その秘密を解く手がかりを見つけることができなかった。しかし、苦労した結果、小屋の中で数ヶ月暮らす間に、一番よく話に出てくるものについている名前が分かってきた。例えば火、牛乳、パン、薪などという言葉を覚え、使ってみた。それから、この家の人たちの名前も覚えた。若い連中の名前はいくつもあったが、老人はお父さんというたった一つの名前で呼ばれた。娘は妹とかアガタ、若い男はフェリクス、兄さん、息子などと呼ばれた。こういった声音に当てはまる観念を知り、それを発音できるようになったときの歓びは、とても言い表す事ができない。まだ、理解したり使用したりするところまではいかなかったが、良い、親愛、不幸せというような、その他のいろいろな言葉も区別できるようになった。」

Volume II, Chapter IV　試訳は筆者

こういった明確な特徴を描かれているにも関わらず、本作品が1818 年に出版されて以降、現在に至るまで多くの派生作品の中で被造物の容姿や性格は変容してきた。その中で被造物のイメージを創り上げ、後世に大きな影響を与えたものは1935 年にユニバーサル・ピクチャーズが作成した映画版の『フランケンシュタインの花嫁』[10*]である。この映画の中でボリス・カーロフ演じるフランケンシュタインの怪物は、不気味な四角い頭部と多くの縫い目を頭部や顔に持ち、頚部に棒状の金属が刺さっている。この外見は映画を鑑賞した人々に印象を強く残し、現在に至るまで怪物を表現する典型的なイメージとなっている。そしてこのイメージはホラー映画愛好家であった藤子不二雄氏の手で漫画『怪物くん』[11*]の登場人物フランケンとして描かれ、日本中に幅広く知られるものとなったことを紹介した。

2.4.　受講者のアンケート結果から

講座終了後、受講者にアンケートへの回答をお願いし「今回の市民文化サロンについて感想をお聞かせください」という項目を次年度の講座内容改善案の指標とした。その項目に書かれていた回答は「ホラー作品を女性が書いたなんて信じられない」「当時のイギリスにおける女性の扱いの酷さを知らなかった」「ただの怖い話だと思っていたが、そうではないところが面白かった」「怪物がかわいそう」といった、本作品を取り巻く情報への興味関心が深まったとみられる感想が寄せられた。一方、「もっと物語の内容を深く知りたい」「なぜヴィクターが野心に憑りつかれてしまったのか」など、作品の内容理解を求める指摘も見られた。これらアンケート結果によると主催者が設定した"作品の周辺知識の導入"という目的は達成できたと考えられる。しかし受講者のニーズに合致した講座であったか、受講者のニーズの掘り起こしを達成できたかという点においては課題の残る講座内容であった。以下に令和4 年度のアンケート項目及び結果を記載する。

アンケート項目及び結果

1. 職業等

無職4 名（60 代以上4 名）、社会人3 名（40 代2 名、20 代1 名）

2. 今回の市民文化サロンを何で知りましたか

チラシ4 名、宇部高専ホームページ3 名

3. 開催時間や場所について。

1）開催日・開催日数は良かったでしょうか。：良かった7 名

2）開催時刻・時間帯は良かったでしょうか。：良かった7 名

4. 内容は分かりやすかったですか。

理解できた3 名、まあまあ理解できた2 名、どちらともいえない2 名

5. 受講形態・学習方法について、ご要望等がありましたらご記入ください。

なし

6. 今回の文化サロンの満足度はいかがだったでしょうか。

大変満足5 名、満足2 名

7. 今回の文化サロンを受講した感想をご記入ください。

「ホラー作品を女性が書いたなんて信じられない。」「当時のイギリスにおける女性の扱いの酷さを知らなかったため興味深かった。」「ただの怖い話だと思っていたが、そうではないところが面白かった。」「怪物がかわいそう。」「もっと物語の内容を深く知りたい。」「なぜヴィクターが野心に憑りつかれてしまったのか。」

8. 今後、開催を希望する講座の内容・テーマがありましたらご記入ください。

イアン・マキューアン、エリザベス・ストラウト、ジョン・アーヴィング、スティーブン・キング、シェイクスピア、チャールズ・ディケンズ、エミリ・ブロンテ

3.　令和6 年度講座内容実施報告

3.1.　*The Daydreamer* を題材とした目的

当作品をサロンで扱った目的は、子どもならではの想像力溢れる視点から見る世界の面白さと、主人公が子どもから大人へと成長していく過程を追体験してもらうことである。当作品の魅力は、誰もが経験した11 歳の子ども時代を、想像力溢れる子どもの視点や語彙で表現したところにある。受講される方々の多くが経験したことのある年齢であることから、懐かしさや子どもらしいおかしみを再発見してもらうべく児童書の講読を行った。

3.2.　作者についての導入

当該作品の著者は、取り上げた作品以外にもサマセット・モーム賞や世界的に権威ある文学賞の一つブッカー賞を受賞するなど、緻密な世界観と豊かな表現力を持った作品を書いている。取り上げた作品以外の著作は場面や人物の設定が緻密且つ難解なため限られた時間のなかでの講読には適さないと考え、児童書を選択した。今年度は著者紹介を可能な限り端的に済ませ、多くの時間を講読に充てた。

3.3.　主人公の特徴に焦点を当てた講読

今回もハンドアウトを自作し、場面設定が分かりやすく子どもならではの視点や主人公ピーターのおかしみが表現されている箇所を引用し講読した。その中から特に参加者の反応が顕著だと感じられた"主人公ピーターが紹介される場面"、"現実を客観視しているピーター"、"大人になることを瞬間的に理解したピーター"を取り上げる。ハンドアウトの引用部は原文 [12*]と和訳 [13*]を併記しており、和訳は『夢みるピーターの七つの冒険』から抜粋した。

Now, grown-ups like to think they know what's going on inside a ten-year-old's head. And it's impossible to know what someone is thinking if they keep quiet about it. People would see Peter lying on his back on a summer's afternoon, chewing a piece of grass and staring at the sky. 'Peter, Peter! What are you thinking about?' they would call to him. And Peter would sit up with a start. 'Oh, nothing. Nothing at all.' Grownups knew that something was going on inside that head, but they couldn't hear it or see it or feel it. They couldn't tell Peter to stop it, because they did not know what it was he was doing in there.

Introducing Peter, p.2

さて、大人というものは、10 歳の子どもの頭のなかでいまなにが起こっているのか、自分たちにはわかっていると思いたがります。ところが、ひとがなにを考えているかは、そのひとが教えてくれなかったら、わかりようがありません。夏の午後、ピーターはごろりと寝ころがり、草をかみながらじっと空をみつめていることがよくありました。それを見て大人は、「ピーター、ピーターったら！なにを考えているの？」と声をかけてきます。それでピーターは、はっとして体を起こします。「ううん、べつに。べつになにも」大人たちも、相手の頭のなかでなにかが起こっていることはわかるのですが、そのなにかは耳で聞くことも、目でみることも、手でさわることもできません。ピーターにむかって「そんなことはやめなさい」というわけにもいきません。なぜといって、ピーターが頭のなかでいまやっているのかいったいなんなのか、わからないのですから。

ピーターはこんな子ども, p.15

When Peter woke in the morning, he always kept his eyes closed until he had answered two simple questions. They always came to him in the same order. Question one: who am I? Oh yes, Peter, aged ten and a half. Then, still with his eyes closed, question two: what day of the week is it? And there it would be, a fact as solid and as immoveable as a mountain. Tuesday. Another school day. Then he would pull the blankets over his head and sink deeper into his own warmth and let the friendly darkness swallow him up. He could almost pretend he did not exist. But he knew he would have to force himself out. The whole world agreed it was Tuesday. The earth itself, hurtling through cold space, spinning and revolving around the sun, had brought everyone to Tuesday and there was nothing Peter, his parents or the government could do to change the fact. He would have to get up, or miss his bus and be late and get into trouble.

The Cat, p.24

朝、目がさめると、ピーターはいつも目をとじたまま、ふたつの簡単な問いにこたえるのでした。問いはいつもおなじ順番でピーターの頭にうかびます。問い 1 ― ぼくはだれだ？そうだった、ピーターだ。としは 10 歳半。つぎに、目はまだとじたまま、問い 2 ― きょうは何曜日だっけ？するとそこに、山のようにどっしりと、どうしても動かせない事実があります。火曜日。また学校にいく日です。それからピーターは毛布をあたまのうえまでひっぱりあげて、じぶんのつくったあたたかさのなかにしずみこみ、やさしい暗闇に身体をつつんでもらいます。ぼくは存在しないんだ、そんな気さえしてきます。でも、わかってはいるのです。いやでもでていかなくてはいけません。きょうは火曜日だと、全世界の意見が一致しているのです。つめたい宇宙空間を猛スピードでとびながら、こまのようにまわり、太陽のまわりをめぐっている地球、その地球自体が、みんなを火曜日へとつれてきたのです。この事実をかえたくても、ピーターにも、ピーターのお父さんお母さんにも、政府にも、どうしようもありません。ピーターは起きなくてはなりません。そうしないとバスにのりそこなって、遅刻をして、しかられます。

ネコ, pp.57-58

Peter continued to stand with his back to the sea. A sudden cool wind made him shiver. He looked towards the cottages. He could just make out the low murmur of adult conversation, the sound of a wine-cork being pulled, the musical sound of a woman's laughter, perhaps his mother's. Standing there that August evening between the two groups, the sea lapping round his bare feet, Peter suddenly grasped something very obvious and terrible: one day he would leave the group that ran wild up and down the beach, and he would join the group that sat and talked. It was hard to believe, but he knew it was true. He would care about different things, about work, money and tax, cheque-books, keys and coffee, and talking and sitting, endless sitting.

These thoughts were on his mind as he got into bed that night. And they were not exactly happy thoughts. How could he be happy at the prospect of a life spent sitting down and talking? Or doing errands and going to work? And never playing, never *really* having fun. One day he would be an entirely different person. It would happen so slowly he would not even notice, and when it had, his brilliant, playful eleven-year-

old self would be as far away, as peculiar and as difficult to understand, as all grown-ups seemed to him now. And with these sad thoughts he drifted into sleep.

The Grown-up, pp.96-97

そのままピーターは海に背を向けて立っていました。とつぜん、すずしい風がふいてきて、ピーターは身ぶるいしました。貸し別荘のほうに目をやります。大人たちの会話がひくいつぶやきのようになって、かすかに聞こえます。ワインの栓をぬく音。だれか女のひとの、耳にこころよい笑い声。あれはピーターのお母さんかもしれません。こうして、はだしの足を波にあらわれながら、2つのグループの真ん中に立っていたそのとき、ピーターはとつぜん、ごくあたりまえの、しかしおそろしい事実を理解しました。つまり、いつか自分も、むちゃくちゃに浜をかけずりまわるグループをはなれ、腰をおろしておしゃべりするグループにくわわるのだということです。それはちょっと信じられないことでしたが、でも、そうにちがいないことはわかりました。いつか自分も、いまとはちがうことを気にかけるようになるのです。仕事やお金や税金のこと。小切手帳に鍵にコーヒー。それから、おしゃべりすること、腰をおろすこと。いつまでも、いつまでも、腰をおろしていること。

そんなことをまだ考えながら、その晩ピーターはベッドにはいりました。それは、考えてたのしいこととはいえませんでした。腰をおろしておしゃべりする生活がまっていると考えて、どうして楽しい気持ちになれるでしょう。おしゃべりしているのでなければ、用事を片付けたり、仕事にでかけたりする生活。そして遊ぶということ、本当にたのしく遊ぶということのない生活。いつか自分も、いまとはぜんぜんちがう人間になるのです。その変化はとてもゆっくりと進行しますから、自分自身で気づきさえしないでしょう。しかし、その変化がおわったときには、ひかりかがやく、いたずらな11歳の自分は、奇妙で理解しがたい、とおい存在になっているのです。ちょうど、いまの自分にとっては、大人がみんな奇妙で、理解しがたく思えるのとおなじように。というわけで、そんなかなしい考えを胸に、ピーターはふわふわと眠りのなかにはいっていきました。

大人, pp.195- 197

これらの引用部を読み進めている最中、受講者からは笑い声が上がった。これらの場面を想像し、自分自身と重ね、子どもらしい視点で現実を表現した部分に共感したと考えられる。各引用部を読み、その都度参加者に感想を聞いたところ「今でも朝になると同じ気持ちになるから笑ってしまった」「本当に自覚も無くいつの間にか大人になっていたのでピーターの気持ちが分かる」などの感想が聞かれ、作品を楽しんでいる様子をうかがうことができた。

4. 受講者のアンケート結果から

令和6年度も講座終了と共にアンケートへ回答してもらい、次回以降のフィードバックとした。感想についての項目では「ピーターの審美眼に驚かされた」「立場を変えて物事を見るということに、なるほどと感心した」「ワクワクしながらちょっぴり切なく思ったり、大人と子どもの間を行ったり来たりして読むことができた」など、自身とピーターを重ねたような、内容に触れる感想が寄せられた。参加者はピーターを物語の主人公として自分と切り離した存在ではなく、自身の11歳の頃と重ね合わせ、共通点や相違点を探し楽しんでいるような印象を受けた。アンケート結果を考察すると、令和4年に実施したサロンに比べ作品へ没入できたと考えられるようなものが多く、今回主催者が設定した”作品の世界観を楽しむ”目的は概ね達成したと言える。以下に令和6年度のアンケート項目及び結果を記載する。

アンケート項目及び結果

1. 職業等

無職3名（60代以上2名、無回答1名）

2. 今回の市民文化サロンを何で知りましたか

チラシ2名（無回答1名）

3. 開催時間や場所について。

1）開催日・開催日数は良かったでしょうか。：良かった2名（無回答1名）

2）開催時刻・時間帯は良かったでしょうか。：良かった2名（無回答1名）

4. 内容は分かりやすかったですか。

理解できた1名、まあまあ理解できた1名（無回答1名）

5. 受講形態・学習方法について、ご要望等がありましたらご記入ください。

なし

6. 今回の文化サロンの満足度はいかがだったでしょうか。

大変満足2名（無回答1名）

7. 今回の文化サロンを受講した感想をご記入ください。

「ピーターの審美眼に驚かされます。」「いつの間にかどっぷり endless sitting の中にいる自分です。」「これらの本の訳本を読みたく思います。」「フランケンシュタインと去年のイギリス中流家庭のストーリー、そして今回の The Daydreamer、どれも新鮮で内容のある素晴らしい英文学を堪能した。学生時代に帰った気分でイギリスの文学風土にふれることができた。」

8. 今後、開催を希望する講座の内容・テーマがありましたらご記入ください。

「英文学の作品を楽しみにしています。」「どのような内容・テーマでも新鮮に感じられると思う。」

5. まとめ

本サロンの目的または期待は、主催者側としては、参加者の英語力の差異に関わらず、文学作品を「感じる」体験を提供する機会の創出にある。さらに、参加者同士の対話を通じて、"同じ場面や表現に対する異なる解釈の共有"および"参加者それぞれの人生経験と作品世界との接点の発見"を期待している。参加者全員で行う講読は、その瞬間体験した気持ちや考えを自由に語り共有することができるため、個人で行う読書体験とは異なる楽しさへと繋がる。令和4年度に実施した講座内容を振り返ると、主催者が設定した目的は受講者のニーズとは合致してい

なかったと考えられる。作品の周辺知識の導入は文学作品を感じるという部分から逸れていたため、本サロンの目的が達成できたとは言い難い。令和6年度に実施した講座内容は主催者が設定した目的と受講者のニーズが合致したと考えられ、参加者の感情や経験を共有する目的が達成できたと言えるのではないだろうか。今後は、受講者が講読したいジャンルに関するニーズの掘り起こしを行い、作品を感じることのできる講座を目指したい。

参考文献

1）George Levine: *Frankenstein* and the Tradition of Realism, From Novel: A Forum on Fiction, vol. 7, no. 1, 17-23, 1973.

2）Marilyn Butler: *Frankenstein* and Radical Science, Times Literary Supplement, 1993.

3）Mary Lascelles: *Pride and Prejudice*, Introduction, 1963.

4）Dudlei Floriano de Oliveira: Cinema, religion and literature: revisiting, recreating and reshaping Jane Austen's *Pride and Prejudice* as a 21st century comedy, 2012.

5）Chalupský, Petr: “Freedom, Spontaneity, Imagination and the Loss of Innocence – the Theme of Childhood in Ian McEwan's Fiction.” Literary Childhoods: Growing up in British and American Literature. Bubíková, Šárka et al. Červený Kostelec: Pavel Mervart, 51-65. Print. 2008.

6）Martina Klimovičová: Childhood in Selected Novels by Ian McEwan, 2013.

7）「原作から読み解くフランケンシュタインの正体」令和4年10月22日及び11月26日　参加者：7名　場所：宇部高専図書館棟2階マルチメディア学習室

8）「*The Daydreamer* を読む」令和6年10月26日及び11月30日　参加者：3名　場所：宇部高専図書館棟2階マルチメディア学習室

9）Mary Shelley: *Frankenstein*, Norton Critical Edition, 1996.

10）James Whale: *Bride of Frankenstein,* Universal Pictures., 1935.

11）藤子不二雄, 怪物くん, 少年画報社, 1965.

12）Ian McEwan: *The Daydreamer*, A Puffin Book, 1994.

13）イアン・マキューアン著, 真野 泰訳:『夢みるピーターの七つの冒険』, 中央公論新社, 2001.